

# 六、オール・ロマンス差別糾弾闘争

(一) 資料

雑誌『オール・ロマンス』掲載

小説「特殊部落」 (杉山清一著)

ペンネーム

「特殊部落」は、昭和二十六年十月一日発行の『オール・ロマンス』に掲載された。この小説は、著者杉山清一が、戦時下の日本社会における差別と偏見を鋭く描き出した傑作である。主人公の苦闘と奮闘が、読者の心を強く打つ。この小説は、戦時下の日本社会における差別と偏見を鋭く描き出した傑作である。主人公の苦闘と奮闘が、読者の心を強く打つ。

## 小説 特殊部落

杉山清一  
杉山清一  
杉山清一



猛り狂う海流の中に咲いた、人種を超越した花。高なるヒューマニズムの華。

50

昭和26年10月1日発行

株式会社 オール・ロマンス社

(朝田善之助所蔵本)

(註)

原本は前ページのよう  
に四段組みとなっておりますが、  
紙面の都合により三段組み  
に編集いたしました。

なお活字・カットは原本  
のものをそのまま縮少印刷  
いたしました。

一  
汽軍が京都駅に着いたのは、二十三時過ぎだった。

駅の構外に出ると、宿引きヤリンタクマシがうるさくつきまとふのを振り切つて、暗い駅前公園へ出た。丸物デパートも中央郵便局も静かに暗闇のなかに眠っていた。「ちよつと、あしたはん、遊んで行つたらどうや」

、ワンピースのパン助が寄り添つて来て言つた。なに心なく暗がりに存いた白い顔を見ると、どこか純子に似た顔だちの女がいた。

「もう遅いから、安く負けといタげる。ねえ、遊んで」

「駄目だよ」

とり合はずに歩き出したが、

「チエツ、お金がないんやろ」

と、後から悪たれ口を浴びせられた。

静岡の生家へ亡父の年忌で帰つた匝谷浩一が、清水新道の家に戻つた時、住み込み看護婦の秋子も女中のスガ婆さんも、まだ寝ますに待つていた。帰宅時間を静岡から

電報で報せてあつたからだ。

「お帰んなさい。お假れだつたでせう」

と、手持たずの戦争末亡人で、年輩も四十振みの秋子が、玄關先に迎え出た。

「汽軍が混んでね、遅りに選つて開列車に乗り合はせたんだから、目も当てられない始末でした」

浩一は漸く辿り着いた気安さに、手荷物を取り出して、額を拭きながら言つた。「本当に、近頃の旅行は命がけだと言ひますもの」

「往きには乗に腰掛けて行つたんで、安心して切つていたら、飛んだ地獄の雲き目を見て仕舞ひました」

上つて座敷に落ち着くなり、賞められたさも幾らかは手伝つて、

「先生、お風呂がよう沸いとりますさかい直ぐにもお入りやす」

と、スガ婆さんが横合から口を抉んだ。

「それは有難い。ひと休みしてから、いたゞくとしませう」

浩一はワイシャツの胸をはだけて、風を入れた。

「なにしろ狭い通路までぎつしり入り込んで、身動きも出来ないのには弱りました。乗客の大部分が闇のかつき屋です」

「それぢやあ、終戦直後の買出し部隊が出動した時代と、ちつとも変りがないんですわねえ」

「いや、あの頃よりも懸念です。一騎当千の闇のかつき屋が、集団で乗り込んで来るとです。警察がそれを追ひ廻して、列車の中で衝突したのを、現にこの目で見て吃驚しました。東山トンネルを出る時分から、

乗客たちの間に異常な気配が動き出したんです。加茂川の鉄橋にさしかると、列車の速力が落ちますが、こゝまで来ると、京都駅に張り込みのあるながし、土境の方から信号燈で知らせる仕組みが出来ているんですね」

「まあ、驚いた」

「張つてるぞつと、車中に誰かの声がかゝつた瞬間、かつき屋連中は一斉に背負ひ込んだ荷物を、窓から河原の藪へ放り出したんです。手当り次第、荷物に自他の見境などつけやしません。と、それを制止するため、それまで入口に潜伏していた私

眼連中が、清員の軍内へ逃二無二雪崩れ込んで来て、忽ち、鼻叫喚の乱闘場になつたんです。凄いのなあの、それは全くお話の外でした」

「さういことですのねえ」

と、秋子はこれもお附合ひの一つと心得てか、仰山に肩をすぼめて、戦慄の表情をして見せた。

鉄橋を渡つた河原附近は東七条になる。

この附近一帯は所謂柳原と呼ばれる広大な特殊部落のあるところ。浩一の家とは、つい目と鼻の附近なのだった。

車窓から放り出された荷物は、部落の人たちに取捨され、後で荷主が引取りに来れば、一個百円の手数料で渡すのだが、なかに一日待つても荷主の出ない分は、拵得者の所有になるのが定法。これは闇のかつぎ屋が駆でブツチャケに運び、公定価格で捲き上げられるのに対抗して、案出された賊法なのだ。

柳原部落に患家を持つた浩一が、既にこの事実のあることを聞いて知つてはいたがそれを現実を目撃して、強いショックを受けたものらしい。帰る早々の土産話がこれ

だった。

丁度その時、玄関のベルが鳴つた。医院の看板に赤い軒燈を出していれば、ベルが鳴るのに時間の制限はない。当然のこのやうな面持ちで、秋子が座を立つて行つた。暫く誰かと話し込んでいたが、取つて返すと、

「先生、交番のお巡りさんが、行路病者を連れて来たんです。御診察なさいますか」

「診ませう。いゝですよ」

「お帰り早々で、お疲れでございませうに」

「かまひません」

浩一は自ら先に立つて、玄関に出た。

ひどく苦悶さうな朝鮮の老婦人を小脇に支へながら、若い警官が立つていた。

「夜分に遅く恐縮ですが、お願ひします」

「どうしました？」

「大分腹痛がひどい様子なんです」

「それはいけません。直ぐに診ませう」

快く診察室に招じ上げて、勿体ぶる気配もなく、診察にかゝつた。

元来、浩一は内鮮の混血児だった。父親が朝鮮で、母親は静岡なのだった。両親が釜山で雑貨問屋を経営していたので、中学

までは彼方で卒業したが、高等学校と大学とは京都へ来て卒業した。

早く戦時中に商売に見切りをつけて、母親の郷里に引揚げた一家は、宿痼の腎臓病で父親が死亡した後も、立派に生活の立つものを持つていた。医院を開業出来たのも、遺産があつたればこそで、混血児であることを除外して、かうした意味だけでは境遇が恵まれていた。

今、連れ込まれたのが朝鮮人だったので、浩一は同胸愛を喚起して、損得をはなれて脈をとつた。慎重に診察した結果が、痛風の発作と分つて、患部に温罨法をして、アトフアニールの筋肉注射を射つた。

「今夜はこゝへ寝かせてあげませう」

「それまでにして頂けたら、誠に有難いですな。御覧の通り言葉がよく通じませんので、聞かれました。これで、私も肩の荷がおります」

やがて、警官は責任をはたしてほつと安堵したもののやうに、拵を述べると、明朝また訪ねることを約して帰つたが、そのあと夜の静寂を縫つて、大谷墓地のあたりから、犬の遠吠が聞えて来た。夜も大分更け

たらしい。

ふと浩一の心に、駅前で会つたパン助の顔が、反芻作用でもあるかのやうに、まざまざと思ひ浮んだ。

## 一

東海道本線のガードに近い加茂川堤は、塵埃の山で埋つていた。近くに、いつも朝鮮の目脂餅漬果ては痘痕の滌たれつ子たちが、殆ど裸体に近い風俗で、砕うつ洗濯女や長煙管を喫かす老人の間を縫つて、遊び戯れている空地があり、それを眼下に見下す位置に、大きな門構への家があつた。河合芳太郎と櫻札を出した門を入るならば、時節柄、わんざと群集する蠅が飛び立つ前に、先づ異臭鼻をつく奇怪な堆積が目止まる。

こゝは、屠殺場の出物を払下げて棄とする、關物屋なのだ。主人の芳太郎は三十前だが、人間はしつかり者で、土地の青年連盟の幹事役を引き受けていた。母親との二人暮しで、まだ独身なのには訳があつた。その庭先へ今朝方までに山と積み上げたのは、關列車の窓から放り出された手荷物

だつた。リニツクサツクが多数だが、その外は千差萬別、手当り放題に放り出しただけのことはあつた。

荷物には通し番号が打つてあつて、帳簿を見ると、一見して拾得者が分るのだ。これらの世話は、土地の青年連盟が一手に引き受けていた。

荷主が手ぬめ荷物の目印とか内容とかを申し出ると、現物と照合して呉れるが、その際、荷主が支払ふ一個百円の手数料は、そつくり拾得者に支払はれる。荷主が現はれないで、現物が拾得者の所得になる分に對してのみ、現物切半の賦課徴収をする。これは馬鹿にならない青年連盟の所得なのだ。

荷主も大方は心得たもので、殆どが午前中には引き取つて仕舞つて呉れるから、夕刻まで残るのは、大抵が荷主の出ない口なのだ。

荷主はあとからあとからひつくりなしに現はれた。何れも佃なじみのかつき屋なので、手数料もはずんで出した。

夕刻になつて、この投げ荷の整理がひと片附くと、青年連盟の連中が幸福仁の酒場

「白鳥」に引揚げて、慰勞会を持つものもいづもに交らぬ傍で、今日も一同が「白鳥」へ乗り込んだのは、六時少し前だつたら、外はまだ明るかつた。

この大衆酒場の常連といふのは、日勤労働者が上の部で、博徒や愚連隊から街のアンちゃんといつたところ。一つ口のきゝ方が間違つたら、どこからビール瓶が飛んで来ないものでもない雰囲気なのだつた。みんな大声で思ひ思ひのことを喋り、或ひは酔つてひつくり返り、所稱は「反吐を吐く。それを魚にまた一杯やらうといふ連中はかりだから、始末が悪い。

流石に、今日は青年連盟の同志だけで、店内を占拠した恰好だつたから、幾分安逸な気分が横溢していたが、土地の風格には変りがなかつた。

それでも、こんな店にも女はいた。二十七八で、淡いブルーのワンピースで、色のついたゴム引きの前踵を腰に結び、パーマで縮らせた髪が赤茶色なのに、唇がまたやけに赤い。身体つきもゴツゴツとして大きく、荒くれ男も尻の河童。ひと皮剥いたら病毒に蝕まれて、肌には斑点も見えやうとい

ふ代物だが、名前だけは女学生じみて、小夜子と言つた。

昨夜からの動員で、流石に疲労した青年たちは、ひと騒ぎわつと騒いで引き上げたが、幹部どころの四五名がまだあとに残つた。

「お小夜はん、もう一杯注いどくなはれ」  
「芳はん、そないに飲んで、大事おへんか」

「なあに、これしきのこと、へばりおつたらどもならへん」

「もうえゝ加減にしなはつたら、どうや」  
「飲ましてくれへんのか。ほんなら、もう来てやらへんがな」

「もしたら、店もせいせいするでしやる」  
「へん、こいつ。口のへらん女子やな」

そこへ外から二人づれの酔客が、ふらふらと入つて来た。何れもずんぐりした身体を、油染みた襦袢に包んでをり、顔の色は陽にやけて黒く、癖のある目つきの男たちだつた

「姫はん、ドブロクをお呉れんか」

年輩の男は椅子に掛けると、注文を出しつたの男を顧りみた。

「帰るまでは持つさかい、心配せんでえわ」

「降られて帰るのも、満更ぢやあらへんさかい。よし度胸を据えて、飲んだろ」

この附近には見慣れない風貌の客だつた。ふりの客だけに、連盟の青年たちは誰もが一様に敬遠した。

一人の客がコップを一気に飲み乾すのを「ほうれ、こゝら辺のドブロクは格別にうまいことでつしやる」

と、他の一人が歯を刺き出して機嫌よく笑ひながら、難し立てゝ言つた。

このなんでもない言葉が、芳太郎の感情に突き刺さつた。黙つて立ち上がった芳太郎は、仲間の新一に目配せをして、ぶいと表へ姿を消した。それで、新一も一歩おくれ表へ出て行つた。

芳太郎は「白鳥」の店から数間先の電柱に靠れて立つていた。

「芳はん、どうしたんや」

「奴等はデカのスパイヤ。ドブ倉を探しに来たんどうせ」

「ほんまにさうや。俺もひと目でそないに覗んだわ」

「こいつはちよつとうるさいことになりそらやな」

「危いやうなら、先手を打たんならんでつしやる。こらえらいこつちや」

「済まんが、見張つていて呉れへんか。俺はなかへ知らさんならんよつてなあ」

初夏の夜は漸くとつぷりと暮れて、数匹の蝙蝠が家並みを掠めて飛び群れていた。

### 三

入坂神社の丹塗りの門を入ると、こんもりとした樹立の蔭を斜に石敷道がついていた。この辺りは涼みの人影も見えず、恋を追ふ男女にはこの上もない深い闇の色に包まれていた。

浩一は純子の肩に手を置いて、悪魔の電車の軋りを聞きながら、もたもたした感情を整理しやうとして唇をなめた。

「早く帰つて来やうと思つても、まさかさうばかりもいきませんでねえ」

「今夜のお約束があつたんですもの、きつとお帰りにかと思つていましたわ。でも、昨夜が遅くて、お遅れだつたでしよ」  
「いゝえ、あなたのことを思ふと、やはり

京都へ帰りたい一心で、飛んで来ました」  
「まあ、お母様がこんなに早くよく帰して下さったわね」

「母はとても理解があるんです。今夜の約束のあることを話したら、黙って帰して呉れました」

「私のこと、お話になつたんですか」

「ええ、そもそも最初から話して来ました  
母も大変喜んで呉れましたよ」

浩一が純子を知つたのはこの時のこと、純子が妙法院の通りでトラックにはねられて、担ぎ込まれたのを治療した時が最初だった。大した怪我でもなかつたので、毎日通つて治療に来るうちに、若い者同志は急速に接近して、休診の日には松竹屋の映画も観たし、東山の蘇の小径を散歩もした。二人が離れられない關係を結んだのは、五月下旬の宵、清水寺から歌の中山へ続く幹から清閑寺への新儀の道を歩いた時のことだった。

松の根方に並んで腰を下して、とりとめもない青春の会話を交はすうち、浩一が声を弾ませて、真剣に訊ねた。

「もしも私がプロポーズしたら、受けて呉

れますか」

「さあ、そんな御返事を今直ぐに出来るほど、心に準備していませんわ」

と、純子は明瞭に答へた。

「どうして？」

「それは言へないわ。なんとなく、私たちは一緒になれさうにもないと思ふの上」

「あなたに愛がないとでも仰有るんですか」

「うん、信じて。私、あなたを心から愛しているわ。私あなたのものの上。でもね、どんなに二人が愛し合つても、結婚なんて覚束ないことよ」

「どうしてだらう。私には分らない」

「そんなこと、今は分らなくなつてもいいの上」

浩一は純子の背に手を廻して、自分の胸へ引き寄せると、長い鬚毛の襟をちつと噴めた。純子は初めて経験する抱擁に、呼吸も乱れがちになつて、身体を硬直するのを覚えていた。

「その理由を聞かせて下さい」

「いやよ。そんなことは考へないでもい

ことよ」

純子が昂奮で大きな呼吸に喘ぎ、自覚もせずに男の片手を握つた瞬間、浩一の頬へるやうな唇が、その上に覆ひかぶさつた。

はつと息も詰る思ひで目を閉じると、そのまゝ、純子の心臓は破裂しさうな思ひがした。

かうしてお互ひに胸を近づけていると、

あの時の昂奮がまた胸に轟つて来て、浩一はそつと唇を求めずには居られなかつた

思ひしな胸を肩から背に廻して接吻しやうとすると、純子はそれを拒んで言つた。

「いけないわ」

「どうしたんです？」

「私はやつぱり駄目なんだわ。あなたと結婚出来る身分ぢやないんだわ」

「え、どうしてです？」

「私、日本の籍ぢやないんです。朴純桂つてのが本当の名前なんです」

「そんなことは平気です。私の父も朝鮮の生れでした」

「でも、あなたのお家は立派なんですよ。

私の父は、今ちや柳原の部落者ですわ。父は下プロクの密造をやつています。兄は博徒のやくざです」

「それがなんです。私たちの恋愛の障害にはなりません。民主的社會に階級の差別はない筈です。新しい時代の理が来たんです」

「いゝえ、それは理屈の上だけのことですわ。日本の現状ではまだまだ昔の慣習が、社会的に狭い門になつていますわ。現に私は、姉が結婚に失敗したのを、見て知っています」

「私は環境に支配されるほど、弱虫ぢやないんですよ」

「でも、古い社會の意志と新しい個人の愛情との間で、私は決断がつかないんですわ」

浩一は今更のやうな純子の言葉がうらめしかつた。

「明るい通りへ出て、お茶でも喫ませよう」

と、純子は既に歩き出してゐた。

どんなことがあつても、純子さんと結婚して見せる。特殊部落の者でもいゝ。私は時代の先駆者になつて見せる。さう心に誓ひながら、浩一は純子のあとを追つた。

祇園の通りに出ると、散策の人々さへが

せまこましく動いてゐるやうに見えた。街角に眼の覚めるやうな美しい装ひを添はした三人の舞妓がつと現はれて来た。何かかひそひそと語り合ひながら、小路を曲つて来て、純子たちとすれ違つた。

小刻みな木履の音を後に聞き流しながら二人は南座の側を歩いて、四宗の大橋を渡つた。

「あつ、純子や」

大橋の袂で、人込みのなかに純子たちを発見して、立ち止まつた女があつた。

京都駅前で浩一に誘ひをかけたパン助だつた。昨夜と些かも異なるところのない白のワンピースを着て、ナイロンのバッグを抱えていた。これは純子の姉の泰子だつた。

純子に彼氏が出来たとは夢想もしなかつた泰子は、これまでの自分がヒロインだつた幕が終つて、今度は純子がヒロインの幕があきかけていることを知つた。時代の転移といふものに気がついて、一瞬激しい感傷に浸つて、呆然と立ちつくした。

その肩を後からぼんとたたくいたのは、単衣袖に錦紗の兵児帯を太目に巻いた、五十年舞踏師の母だつた。

「もしもし、泰子はんやつたなあ」

#### 四

部落にあるドロク密造所は、朴根昌の経営するところ。特殊部落に盤踞する鮮人仲間でも、金力を持つことでは指折りの男だつたから、企業を確立しながら部落の農民をうるほし、人望を一身に集めていた。いはゞ、いま日の出の勢の朴根昌だつたが、それほどの男でもどうにも手に負へないことがあつた。

それは、春以来世話する人があつて、河合芳太郎こと金芳成との間に、まとまりかけた縁談を思ひ出して、敢然家庭に反逆し、家出を決行した長女泰麗のことだつた。

實際、泰麗の泰子が家庭に反逆した理由を考へてみても、父親には更に納得の行くものではなかつた。芳太郎が部落の青年のなかで将来性のあることは、衆目の一致するところで、この縁談には父親自身が乗り氣だつたのだ。それだけに父親の責任に於て、娘の行動に隘苦とした。曾て日本人との結婚に失敗した経験をもつ泰麗ではあつたが、若い者の世界が、今では遠絶したも





のにさへ思はれた。

朴根昌には一男二女があつたが、長男は競輪に熱中した挙句、その道のやくざ稼業に嗜ちて、家には寄りつかなくなつた。長女もまた家出をしたとなると、今では二女の純子だけが手の中の玉だつたのだ。

朴根昌は急に年をとつたやうに見えた。四条大橋の袂で、泰子の肩をたゞいたのは、柳原部落の界隈に繩張りを持つ岡越の親分だつた。

「あら、旦那はん」

とあはてる泰子に、親分はおつとりした態度で言つた。

「ちよつとその辺までつき合ひな」

泰子を伴れて、近くのなるべく客の薄さうな喫茶店を選んで入つた。

「なにがえゝ？」

といつて、泰子の方におだやかな面を向けた。

「なにやかてようおますがな」

遠慮がちに答へた。

「アイスクリームを呉れてんか」

と、スマートなドレスを着た喫茶ガールにいつてから、親分は扇子で風を入れた。

「あんた、家を出たさうやないか」

「はあ」

と、度胆を抜かれて、どきまぎした。

「どつつあんがえらう心配しとるがな。早う帰るがええ」

そこへ選ばれて来たアイスクリームを、二人はだまつて食べた。

「帰り難い風やつたら、話はつけたげるさかい、帰つたらええ」

「よう決心して出たもんや。二度と帰る気はあらへんわ」

と、泰子はきつく言つた。

「あかん、あかん。そないにきつう言うても、直ぐと後悔することになるんやぜ」

「私、部落に帰るのはごない、しても厭やわ」

「さうや。あんたの言ひ分、一度聞かしてんか。そいで、あんたの言ふのが正しい思うたら、何も言はんと、あんたの言ひなりにまかしとこ」

さう言はれても、泰子はまだ頭なりに折れなかつた。

「旦那はんの気持ちにはよう分るのやけど……」

と、言葉尻を演じて、黙つて仕舞つた。親分はふと思ひついたやうにして、

「うん、さうや。こないなところは話にくかるさかい、家へ行こ。そしてゆつくりと相談したら、どうや」

「そないして、お手数かけてもあきまへんわ」

「まあ、ええわ。あんじようええやうに考へたげる。まかしておくがええ」

そとへ出ると、四條の駅前からハイヤーを拾つて、七條新地に近い図越の家まで乗りつけた。門燈の出た格子戸を開けると

「おかへりやす」

三下の鉄が玄關に顔を出した。

「お客はんや、二階へ案内してんか」

「へえ」

泰子は鉄の案内で、直ぐと二階座敷へ通された。

部落者には図越一家の息がかゝつていた。朴根昌は特に親分と親しいつながりがあつて、泰子はこれまでにもつけ届けの物を持つて、幾度か訪ねて来たことはあつたが、二階座敷へ通るのは今夜が初めてだつた。

風がよく吹き込んで、座敷障子の裾を關つていた。

「かたくならんと、楽にいたらええ」

親分が現はれて言つた。

「尊やと、芳を嫌うての家出やさうやないか」

「ちがひまんが……」

「こらあかん。別にわけがあるのんか」

「芳はんでなうても、部落んちでかたづけのが、厭で厭でならんのどつせ」

「怪体なこといふのんやな」

と、驚きの顔を見張つた。

「考へても見やはいな。一度結婚に失敗した私どすさかい、なにもかもよう分つてまんね。部落者はいつまでも部落者で、いつも浮ぶことがあらへんわ」

「そないなこと言うて、ほんなら、ごないする了簡や」

「なんでもええで、部落者だけ止めとこ思ひますねん。そのためにはパンパンでもかまへんで、ひとり食べんなんら思ふとるのどつせ」

「なんや阿呆らしい。そないなこと言はん

とおき。部落者のどこにひげ目を覚えるんや」

「ほんなら、聞きまひよ。世間では、部落者にえゝ顔せんやおへんか」

親分は初めて大声に笑ひ出した。

「なるほどな。部落者よりペン助の方がましかいな」

その時、遠く踏段を踏んで、誰かが上つて来た。意気込んだ男の音が、

「親分、柳原に事件が出来ましたえ」

「なんや。はつきり言うてんか」

「土地の若い者が、デカとぶつかつたというてまつせ」

「ふう、ほんなら、ほつたらかいてもおけんわ」

親分は屹つと腹を据えて言つた。

## 五

「ドブロクは柳原に限るといふもんや」

「ほんまや。なあ、姐はん。これからは毎日出向いて飲まして貰ふさかい。ようサービスしてんか」

「白鳥」の酒場で、葉ツ葉服の二人づれば腹を落ち付けて、飲み呆けていた。

「こちらはん、トウ雪はんわ。初めて見えて、もうてんご。替うていやはる」

と、小夜子がぞつぽく言つた。

「まあまあ、姐はんを狙うて来やういうてんのやあらへん。ドブロクがあてや。安心しいうな」

となり合はせの席に、きつかけを待つていた土地の若者が、この時ついと身をひるがへすと、薬みを利かせて言つた。

「よう、ドブロクのながあてや。聞かしてんか」

なにかたゞならぬ空気が漲つた。入口に芳太郎と新一とが立ち寄がるのを見ると、小夜子は急迫した事態を感じて、

そつと奥へ退つて仕舞つた。

目に見えない殺氣、それは死を直感した刹那、誰にでも鋭敏に感じられるものだつた。葉ツ葉服の二人も、この異常な形勢を知つて、ぞつとした。正に戦闘態勢を整へて、立ち上らうとした瞬間、

「警察のスパイ奴ツ！」  
裏んで見せた男が罵声を放つた。

相手は虎口を脱する態勢をたうとしたが、不覚にも酔ひ過ぎていた。身体が硬は

つて自由を欠いた。身を跳す隙もなかつた。

ビール瓶が年輩な一人の脳天で碎けた。

よろよろと二三歩よろめいて倒れた。

若い方の葉ツ葉服が、突如にビートルを取り出して、相手を狙つた。

ダーンと一発。

それで相手は崩折れるやうに、がつくりと板をつくくと、前のめりに倒れた。

それを視野に入れて、表へ跳び出さうとした瞬間、横合からはつしとばかり、一升瓶がその脳天を打つた。

頭が榴榴のやうに口刺れして、顔面に血潮が滝のやうに流れた。そしてそのまへのけそつた。

一瞬間に三つの屍体が転がった酒場の中は、血を見て一層猛り出した連中は、どつと戸外へなだれ出ると、部落の入口にある交番へ向つて殺倒していつた。

不意の襲撃に、交番詰の巡査が対抗する餘裕はなかつた。無数の投石がガラスを破つた。そして暴徒の数は後から後から増し

て行つた。彼等はなにか訳の分らない言葉  
を口々に叫んで、猛り狂つた果ては、巡査  
を血祭りに上げて仕舞つた。

凶悪親分が息を聞いて楯匠に乗り出した  
時は、既に遅かつた。全部落は部落の生命  
線としてドロク密造所を護るために、青  
年を糾合して取起した後だつた。

闇現に燃え、殺氣を孕んだ人間の集団  
は、実に無氣味で恐ろしい破壊力を持つて  
いた。暴徒の集団とこれに対峙する警官隊  
とが、部落の入口付近で激突したのは十時  
過ぎだつた。

せり合ひの喧声は怒号となり、やがて叫  
喚となつた。叫び、殴り、倒れ、そして警  
官隊は前進を焦慮し、暴徒は武器をとつて  
反抗した。

一分隊の警官は、七条大橋詰から加茂川  
堤に沿つて、部落内へ鋭角を作つて突入し  
た。そこにもまた血の雨が降り、血の虹が  
架り、幾人もの人々が愛憎のやうに額へ蹴  
落されていた。どこやらで銃声があつた。  
それがきつかけで激闘は一層激しくなつ  
た。

恰度自動車レースのやうに、証けつけて

来る各新聞社の連中は、その血闘の中を証  
け廻り、叫喚を續つて何本かのフラッシュ  
を發した。救護の警官隊は次々と現場に到  
達して、益々凄惨の氣をあふるばかりだつ  
た。

雨を呼ぶらしく、東山を越して吹きつけ  
る風は、次第に強くなりままつた。加茂川  
の川波も、爬虫類の音のやうに戦慄にそ  
よいで、ざらざらと異様に光つて見えた。

部落が叫喚に埋まり、流血の乱闘に混乱  
する時、部落の一部に火の手があつた。そ  
れを見ると、警官隊は一挙に発火点へ押し  
て行つた。

発火点は朴根昌の住宅だつた。ドロク  
密造の証拠隠滅を図つての放火だつた。こ  
ゝにも荒々しい土足が踏み込んで来て、も  
の凄しい乱闘が視けられた。

警官隊が住宅裏の密造所へ突入した。そ  
して火焰の中から続々と証拠物件を選び出  
したが、その間、断續的に引火したアルコ  
ール分の爆発が起つて、作業は困難を極め  
た。

暴徒たちはまた大挙して逆襲して来た。  
そこゝに乱闘の人影が火燄に躍つて明滅  
した。

乱闘激刻の後、数十名の検束者を出して、  
暴徒の証取が楯匠された時、部落には墓場  
のやうな静寂が来た。そして、生温い風  
が大粒の雨を伴つて、強く吹きつけて来た  
朴根昌の住宅の焼け跡はまたくすぶつて  
いた。焼け落ちた残骸から、細い煙が幾条  
も立ち昇つていた。

警備の警官もまだ配置されず、現場はそ  
のままに放置されていた。

泰子はこの変り果てた焼土に立ちつくし  
て、なにもものへともない憎悪の念に駆りた  
てられるのを覚えた。

## 六

暴徒の証取が楯匠された後に、烈風を交  
へて、車軸をも流さんばかりの豪雨が襲来  
した。この豪雨は朝になつても熄む形勢は  
なく、加茂川は刻々と増水し濁流の渦を巻  
いて流れた。

この豪雨に傷害跡の血痕はあとかたもな  
く洗ひ流されて仕舞つたものゝ、部落の人  
達の怒りはまだ心頭に燃えていた。部落者  
の間には不安と動揺があつて、一層猜疑  
的にそして孤立的になつて、部落外の者に  
敵愾心を募らせていた。

過激な分子の間には、長老の制止をも聞き入れずに、検束者の毒盃を策する向きもあり、死を決して銃砲火薬類を密かに動かして、再挙決戦を挑まうとする向きもあつてなほ危険を孕んだまゝ、爆発への空気が上昇しつゝあつた。

さうした間にも、警察阻止の布令は次々と発せられ、僅かに歌謡して事なきを得てゐる状態だつたが、今朝は凶越親分の肝入りで、小学校に部落の有力者を緊急招集し、事餘の円満解決と善後処置について、碎心協賛を續けていた。

その時分、豪雨を犯して、部落側の負傷者を軒別に手当てして廻る篤志の医師があつた。鹿谷浩一が自発的に博愛の精神を露顯した巡回だつた。レインコートの襟を立て、洋傘を傾けて雨を避けながら、次の患者を探して来る途中で、

「止れッ！」

突然、立ち現はれた数名の壮漢に、前後を取り囲まれた。

「警察の者やう」

「とんでもない。僕は医者ですすよ」

「そないなこと嘘や。柳原へは一切立入り

禁止の管やないか」

「負傷者を手当てして廻つてゐるんです。清水新道に開業している鹿谷です。決して警察の者ぢやありませんよ」

はつきり身分を打ち明かされて、壮漢どもは氣勢を殺がれ、些かたじろく風だつたが、なかの一人がやをら進み出ると言つた。

「ほんなら此奴や。朴はんよこの純子をたぶらかして、始終、四条やたら新京極やたらほつゝき歩くちう女証しの男や」

「道理で、のつべりとした面やないか。芳はんよこの納屋につれていて、斬く牛の頭でも抱かして置くがえッぜ」

どつと哄笑が壯漢どもの間に湧いた。殺氣立つて習性を喪失した彼等は、この勸諭を無批判に容れて、一人の浩一を遮二無二引き立てゝ行つた。落部の娘に手出しをしたといふ青年の嫉妬が、無法な腕力を行使させたのだ。そして浩一は芳太郎の

処の納屋の中へ幽閉されて仕舞つた。しかし、浩一にしてみれば、何故に幽閉されたのか、理由が皆目解らなかつた。

扉を閉めた納屋の中は、むんむんと蒸せ

る思ひがした。昨日の騒物は始末もつかず、片隅に蠅の跣。梁に委され切つていて異臭が鼻を衝いた。この先がどうなるのかも見當がつかかねた。不安な気分だつた。

雨は豪勢に降り止まなかつた。亜鉛葺きの屋根のことゝて、耳も聳せんばかりに喧しい。雨足の露音だつた。

小学校の緊急協議会では甲論、乙駁、敷時間を要した挙句、当局へ陳情書を提出することゝなり、どうやらそれが起草される段取りにまでとり運んだ。起草委員が別室に移つて、文案を練る間、休憩となつた。その時、誰からともなく、教員室での話だと、加茂川が危険水位を突破したさうだと一座に報告された。

やがて草案が出来て、溝場一致可決決定した時には、堤防決壊の恐れがあり、塩小路橋が大分危険は瀕した状態にあるといふ報告に接した。一座はまた新しい災禍を前にして動揺した。

陳情委員たちが凶越親分の案内で、市警本部へ出頭すると、署長は河川の増水に備へて、非常態勢を指令するところだつた。



「ガード下の低地は、床上浸水を始めたんだぜ。落ち着いて、君たちの陳情を聞いても居られまいぢやないか」

署長は凛然として言ひ放つた。陳情委員たちは頗る綱もない気持ちがあった。

「こんな場合やで、署長はんの言やはずところももつともや。どうや、陳情書だけでも受け取つて貰うて置いて、何れこの出水の騒ぎが落ち着いてから、改めてお願ひに出るのがええやないか」

と、函越親分が口を挟んだ。

そこで、委員たちも加首覬覦の結果、代表者が言つた。

「なにもかも旦那はんにおまかせするさかい、あんじようええやうに頼まつせ」

「宜し、わしが引き受けまひよ。なあ、署長はん、こないに並べて来やはつたのは、みんな部落の顔役や。陳情書だけなと受け取つて貰うて、あとは何分稔便な話をつけたいのや」

「分りました。出来るだけのことは考慮しませう。何分委細のことを話している餘裕がない、今の場合です」

「そらええな。そこまで腹を割つてお呉れ

やしたんえ。これで引き取りまんがな。こ  
らおほきに」

圖越親分は署長の前に低く頭を下げた。

## 七

昨夜の騒動に危く検挙の手を逃れた芳太  
郎と新一とは、部落の乾物屋李子膏の奥の  
間に潜伏していた。品番の後の疲労にくつ  
すり寝込んで、目が覚めたのは午後も大分  
遅かった。

「よう眠つたやないか」

「ほんまや。えらい降りやな。降り通しと  
見える」

「こないに降られると、昨夜から持ち越し  
た品番の頭を圧へられて、せうむない」

「そやけど、ルビコンを渡つて仕舞うたん  
や。この先、どないするねん」

と、新一は今更のやうに芳太郎の顔を覗  
いた。

「東京へいて暫く息を抜くのや。心配する  
ことあらへん」

「一緒につれていて呉れやはるか」

「あたりまへや。万事心得ているさかい、  
大船に乗つたつもりでいて結構や」

芳太郎の脳裡には、一昨日偶然に訪ねて  
来た東京二子玉川の金圭運伯母の処へ、落  
ち延びることを考へていた。それは素直な  
着想だった。

一旦落ち延びて、落ち着いたら、人夫を  
してもどろにかやつて行く自信はあつた。

心配なのは、母親一人を置き去りにするこ  
とだったが、部落の青年連盟で面倒を見て  
呉れるに相違はないと思つた。芳太郎はた  
ゞ逃亡の経路に就いて考へればよかつた。

唐突に、部落の半鐘が鳴り出した。

既に旗持つ二人は愕然として、顔を見合  
せた。

「なんやろ」

「手入れやおへんか」

「まさか」

廊下に聲音がして、誰やらが近づいて來  
る氣配がした。二人の神経はすつかりこの  
聲音の方にひきつけられて、動悸が高く波  
打つたのだつた。

廊下に姿を見せたのは、腰から下をぶぶ  
濡れに濡らした泰子だつた。これは誠に予  
想外のことだつた。

「寄せて貰うても宜しおますか」

と、泰子は廊下に立つたまゝで言つた。

「かまへんがな」

「えらいことやつたな」

泰子は芳太郎にずんがりと言つた。

「あんたはん、驚いたでつしやろ」

と、芳太郎が訊ねた。

「そないに驚きもしまへんがな」

「いつ帰つて來やはつたんか」

「昨夜戻つたのどすえ」

「家が焼けてしても、小父はん、どこにど  
ないしていやはるねん？」

「私は知らへん」

と、泰子は静かに打ち消して答へた。

「へえ、家族の安否を探していやはらへん  
のか」

「外に探す人があつたんやで」

「ほら、誰や」

「まあ、誰でもえいこと。言はんとこ。私  
はな、随分えらいこと方々で聞いて、こゝ  
を探り当てゝ來たんやわ」

「そら、なんでや」

「あんたはんにひと言ひたいことがおま  
したさかい。なあ、へ、芳はん、どない考  
へて堤へはいきはらへんのえ」

「堤へ？」

「さうや、しんねりむつりしている場合やおへんがな。あんたはん、堤の切れるのを知らん節に見送るのは、どないしたんや」

「そないなこと、なにも知らへん」

「あんたは卑怯や。半備が鳴つたやろ。昨夜部落が可愛うて立ち上つた人やつたら、今こそ堤へいて働く時やおへんか」

加茂川の堤が切れる。泰子の言葉が芳太郎の肺腑をえぐつた。

「うん、ほんまや。泰子はん、よう知らしてくれやはつた」

芳太郎は新一と堤へ駆けつけることにして、戸外へ出た。横なぐりの大雨が頬に痛かつた。道路は腰を没する態に冠水して仕舞つていた。

常には啼く川千鳥に頼音もやさしい加茂川の水も、今はその形相を一変し、濁々とした濁水が轟々と猛り狂つて流れていた。

七条大橋の交通は遮断され、東海道本線の鉄橋も既に危険に瀕していたし、塩小路橋は冠水して仕舞つていた。しかも堤防を越えた濁水は、滔々として部落地帯へ流れ

込んでいた。

部落の人たちは、決死で塩小路橋の上に立つて、流木が橋脚に衝突するのを防いだり、土俵を運んで堤防の上に積み上げたり懸命な活躍をつづけていた。

堤防が決潰すれば、全部落は全滅する。そしてその危険が刻々に増大する。昨夜は敵味方となつて対峙した警官隊も、今日は部落を守つて活動し、避難民の誘導と収容とに大奮だつた。

塩小路橋はいよいよ危険になつた。その橋上に立つて、芳太郎はたゞ一人、流木の激突するのを防いでいた。

「ほ、危い、危い。引つ返せッ」

誰かを見兼ねて叫んだ瞬間、橋桁が浮いて大きく傾斜した。そして、虚空に差し上げた手が目撃者の視界に残つただけで、芳太郎の姿は塩小路橋踏踏共、水中に消えて仕舞つていた。

## 八

三日降り続いた豪雨が降り息むと、次第に加茂川の水勢は衰へた。

崇高な芳太郎の犠牲は、全部落の人たち

に感銘を身へ、老若男女の区別なく、協力一致して努力した結果が、漸く水腫から部落を救ふことが出来た。

しかし部落は大半が床上浸水して、数日はまだ水底に没していた。そして完全に水が退いた時に、部落は泥土に埋まつて、置るところに鼻を聞く膠臭が充満した。小路の軒下やガード下などは、恰度塵埃を棄て固めたやうな淤泥のなかにあつた。

豪雨の後に、初夏の暑気が急激に訪れると、部落はいよいよ潮濕なものに見えたが果たして数日後、悪疫が発生し、物凄く勢で蔓延し始めた。

赤痢、腸チフス。僅かの間に部落は感腐の砦と化して仕舞つた。

市の衛生班が動員されて、不眠不休の活躍をしたが、水腫に代つた腐蝕は狂蹶を極めて、病痾に陥れる人の数は増大するばかりだつた。

遂に外部との一切の交通が遮断され、小學校に部落防疫対策本部が設置された。部落全住民の糖漿診断が強請され、十数名の医員が手分けして、軒並みに巡回して診察した。その医員たちにまじつて、浩一の妻



が見られた。

さて、一旦、芳太郎の納屋に幽閉された浩一が、どうして無事で居られたのか。今回の事件にとつては、蛇足と思はれる小さな挿話に過ぎなかつたが、これこそは実にこのセミドックユメンタリーの肝要なポイントとなるものだったのだ。

幽閉されて数刻後、外から納屋の戸が開けられた。

「さあ、出て来なはれ。もう大事おへんさかい。」

老婦人の声だった。

白の朝鮮服が目に著くはつきりと見え、

浩一は漸く救はれて出た。

「ひよんな目に逢うたもんえな」

「お蔭で助かりました。突然ぶち込まれたんで、なにがなにやら訳が分らないんです」

「警察の人や思うたんと違ひまつしやろか許してお呉れやす」

「部落の人たちは、いやに神経過敏になっているんです。間違はれたのなら、それは私の不運です。本当にえらい目に会ひまし

た」

「どこまで帰りはるんえ」

「潜水新道です」

「ほんなら、近うおすな。堤が切れさうや言うて部落の中は大騒ぎやで、今の間に早う帰らはるがえ、わ」

「へ、そりや大変です」

既に塵先の大門が閉ざされてあつたので、老婦人は浩一を案内して一度母屋に入り、屋内の通路を抜けて、店先から戸外へ送り出さうと思つたらしかつた。

浩一が老婦人に従つて、薄暗い屋内に足を踏み入れると、大騒の臭ひがつかんと臭つた。

突然、座敷の方から高い朝鮮語で話しかけられた。目を移すと、もう一人の老婦人が浩一の方をちつと睨めていたが、なにやら早口に話すと、通路に立つたのが吃驚して、二言三言二人の間で話し合つていた。

そして、座敷の方が浩一の側へ寄つて来て、丁寧に挨拶をした。

「先だつては済みませんでした」

気がついてみると、一昨日、警官に伴れ

られて来た行路病者の老婦人だった。

「おや、あなたでしたか」

浩一はこの輪廻にたい然とした。善根の無駄でなかつたことを、現実に経験したのだつた。

助け出して呉れたのは芳太郎の母親だったし、助けて上げた行路病者は金圭蓮伯母だったのだ。

この経験は、更に浩一に善に対する信念を植えつけずには置かなかつた。

部落のために、人種を超越した人道のために、浩一をしてなにものをも顧みず、医療班で活躍を続けさせる結果となつた。

また、かうした火急の場合だったから、部落の娘たちは看護班を組織して医療班に協力し、青年たちは清掃班に奉仕した。

そこには部落を挙げて、博愛精神の集結だけがあつた。

昨日、浩一が所属看護班の一人に懇願されて、その妹を採用し参加させる許諾を身へて置いたが、今朝、本部一階の医員室に姉妹揃つて顔を出したのを見ると、妹といふのは純子だった。

「おや、あなたですか」

「お手伝させて下さいませ？」

「有難う。やつて下さい。」

と、浩一は純子の手を執つて、かたく握つた。

やがて看護班の控室へ戻つて来ると、泰子が言つた。

「なあ、え、純子はん、あんたたちはいつでも幸福でいて欲しいわ」

「姉はんかて、早う幸福にならんとあきまへんえ」

「ま、厭いやらし。芳はんが死なはつたんやで私にはもう好きな人ちうやうなもんあらへんえ」

と、たと淋しい笑ひを見せた泰子だつた。

— (終) —